

Dictation に見られる誤りと英語習得

小 沢 志 朗*

Errors in Dictation and the Acquisition of the English Language

Shiro OZAWA

Some items of bilingual television news were given to the sophomores as texts for dictation practice. And the errors in their dictation were sorted out and carefully analyzed according to the criterions of the Miscue Analysis.

The result indicates that the students have certain weakness in listening to spoken English, yet made much progress in their listening comprehension through a number of the practices in three months. One of the result is that the students have gradually begun to cease to leave difficult vocabularies as just blank spaces.

1. はじめに

近年外国との交流が増大するにつれて、外国語教育特に英語教育の重要性がますます高まりつつあり、その教育内容に求められるものも、従来のように単なる受容型から発信型をも含むものになっている。

英語の4技能を単純に発信型と受容型に分けると、「話す、書く」が発信型で「読む、聞く」が受容型である。しかし、五感の点から考えると、「話す、聞く」と、「読む、書く」とに分けられる。さらに即座の反応が要求され、辞書等の補助具の使用が不可能の場合が多い観点から考えるとき、「話す」と「聞く」は同一次元に位置づけられる。ところが、現在極立って求められた教えられてきているのは、「会話能力」のなかでも「話す」面だけであるように見える。しかし、「話す」ことは、当然「聞く」ことが伴わなければならないのではないだろうか。つまり相手の言うことを注意深く聞いて、理解することなくしては「話す」ことが成立し得ないのである。

数年前に、筆者は成人学校での英会話の講座を担当した。しかし、学習者が顕著な上達を示したとは考えられない。「聞く」ことによる英語らしい発想や表現、あるいはレアリアと呼ばれる文化的知識などの蓄積が乏しく、更に話す内容が貧弱であるにも拘らず「話す」ことの練習のみが「話す」能力の養成になると考え、「聞く」練習を軽視してしまった故であった。省みると、「聞く」訓練が「話す」能力を醸成する大きな役割を果たすのではないかと思われるのである。

英語習得のための聴解訓練に筆者は2つの目標を設定したい。1つは相手の発言を正確に

* 一般科 講師

原稿受付 昭和62年9月30日

聞き取り、理解すること。2つ目は耳からの英語を多く聞くことによって、英語らしい発想や表現を無意識のうちに体得することである。

本稿は、以上の2つを目標に高専の5年生の英会話の授業に、聞くことを Dictation という形で取り入れ、そこに表れた誤りを分析することにより英語習得について検討しようとするものである。

2. 実際の方法と結果

テレビの2か国語放送のニュースを録画し、そこから英語の音声の部分をカセットテープに録音する。その後ニュースの中から適当な部分を取り出し、まず画面を2度ほど見せる。このときの音声はもちろん英語であるが、画面には日本語のスーパーが見出しとして出る。次に個々の学習者のカセットテープに英語の音声を録音して Dictation にはいる。時間は全部で15分ほどとる。LL 装置を利用して授業中に行ったものもあれば、宿題にしたものもある。辞書の使用は許可した。

テレビの2か国語放送のニュースを選んだ理由を列挙しておきたい。関根⁽¹⁾が指摘しているように、(1)ニュース文が会話体であること。(2)ニュース文の単純性—ニュース文では普通広く用いられている語義の明確な語が用いられ、文構造では単文が多用されること。(3)ニュース文の活力性—読まれるコピーが活力にあふれ、アナウンサーによってさらに生き生きとしたものになる。効果的な語(一般的単語よりも具体語)が使われ、また受動文より能動文が圧倒的に多用される。以上の他に(4)ニュースは説明しなくても背景を知っていることが多いこと。(5)身近な話題で親近感を持ちやすいこと。(6)視覚に訴えることにより理解がしやすいこと。(7)英米人や英語を母国語とする人以外の多様な生きた英語に接することができる。例えばフィリピン人の英語やフランスなまりの英語、さらに日本人の英語などを聞くことができ、良い訓練になる。

2-1 実際の Dictation とその誤り

問題文 1 昭和62年5月2日(土)夜7時のNHKニュース

A missile dropped accidentally by an American fighter jet in April in mountains north of Hiroshima has been found and American Forces recovered it this evening.

これは、ニュース文の最初の見出し文である。まず、この Dictation の誤りについて分析してみたい。分析の方法は、中畑・ベンソン方式による⁽²⁾。彼らは誤りの分析を Goodman にならい Miscue Analysis と呼び、書取りと音読について分析をしている。筆者が本稿で援用した誤りの各型を次に挙げる。()内は本稿で用いる記号である。

- Substitution (Su) 原文の単語や句読点のかわりに、他の単語や句読点を入れて書いた。
- Non-word substitution (NSu) 代入はしたが、意味のない文字のつながりを代入した。
- Omission (O) 単語や単語の一部、または句読点を書かなかつたり、無視した。
- Insertion (I) 余分な単語や単語の一部、句読点を付け加えて書いた。
- Separation (Se) ある単語をいくつかに分けて書いた。
- Misspelling (M) 実在する単語として認識できるが、辞書を基準にして判断した場合、間違った綴りを書いた。

分析例： () 内に分析の型を示す。(以下記号を使用)

A misail (M) drop (M) accidentry (M) by an American ファイル (O) ジェット (O) in April (O) mountains of (I) noth (M) of Hiroshima has been fand (M) and the (I) American forceses (M) recovereded (M) (O) this evening.

上記のテキストの Dictation 例が18, そのほかに3か月後に行ったものの24例を同様に分析した。

問題文 2 昭和62年9月10日(木)夜7時NHKニュース

Good evening, this is the news at 7 o'clock.

Wide areas of the Japanese archipelago except for Hokkaido are being hit by local heavy rain and thunderstorms. A city in Kyoto prefecture had record heavy precipitation of 99 millimeters between 4 and 5 o'clock this afternoon.

分析例：(方法は前者と同様)

Good evening. This is the news at seven o'clock.

Why (Su) dayly (NSu) was (Su) the Japanese aqperyo (NSu) exsept (M) for Hokkaido (O) been (Su) hit by looked (Su) heavy rain and sunderstorms (NSu). A city in Kyoto pripecture (NSu) hade (M) record heavy priseptation (M) of 99 millimeters between 4 and 5 o'clock this afternoon.

2-2 分析の結果

1) 誤りの種類と誤り語数の平均

	O	M	Su	NSu	I	Se	Total	(全語数)
5/2	4.56	2.67	1.39	1.17	0.5	0	10.28	26
対Total%	44	26	14	11	5			
9/10	5.58	2.83	5.04	2.42	0.13	0.08	16.1	46
対Total%	35	18	31	15	15	0.7	0.5	

2) 各単語に対する誤りの多発例 (b-のように、語のはじめの文字に-の付いたものはO型の例。単語の後の数は誤りの数。-は類似例を含む事を示す。数のない場合は1例のみ。)

- A missile(12) : misail(3), method-(4), a miss of-(2), micile-(2)
- dropped(13) : drop(7), dropt, trap, drag, doroped, dropped
- accidentally(18) : accidentaly(6), accidently-(7), accidentry(2)
- by(1) an(0) American(0) : b-
- fighter(10) jet(7) : f-(6), file, fiducher, fiterjet, faite : j-(7)
- in(10) April(12) : i-(10) : A-(9), to naple, nepo, a plain
- in(8) mountains(9) : i-(6), an(2) : mountain(5), mountans-(4)
- north(4) of(2) Hiroshima(0) : noth(2), nouth(2) : o-(2)
- has(3) been(4) found(3) : h-(2), had : b-(3), bean : find, faund, bomb
- and(1) American(3) : a- : A-(2), america,
- Forces(9) : F-(5), forthes, force is, forceses, air forces(2)

recovered(13) it(10)	: r-(3), recover(3), we covered ⁻ (2),	: i-(10)
this(2) evening(2)	: t-(2) : e-(2)	
Good(4) evening(5)	: G(3) : e-(3), Grenning, evning	
this(3) is(3) the(6) news(5)	: t-(3) : i-(3), start(2), still	: t-(6) : n-(5)
at(2) seven(2) o'clock. (2)	: a-(2) : s-(2) : o-(2)	
Wide(21)	: While(6), Why(5), W-(3), Widely(2), Wild(2)	
areas(21)	: a-(6), day as(4), there is(4), dailly(4)	
of(9) the(17) Japanese(1)	: o-(9) : t-(17) : at(3) : Japanese	
archipelago(23)	: a-(10), paragram, occuperial, aquper go, aqu-	
	peleger, ociprigal, aqpery go, okiperika, pala-	
	glagh, occupy, paragriese, a pair of	
except(16) for(3)	: exsept(8), exsep(2), expect(2), e-	: f-(3)
are(24) being(22) hit(5)	: a-(23), have : been(21), be : hip(2), had(2),	
	it	
by(2) local(22)	: b-(2) : look(9), looked(5), l-(3), record(2),	
	locul	
heavy(8) rain(6)	: hevey(2), hevy(2), heavey, hebi	: raining
	(2), lain	
and(5) thunderstorms. (22)	: a-(5) : sundertorms(5), sandstorms ⁻ (5), san-	
	dstort, thousand stones, thunderstom, founder,	
	fund stooms	
A(3) city(2)	: A-(3) : c-(1), set	: The(9), At(2), And, of
in(3) Kyoto(0)	: i-(3)	
prefecture(13)	: prifacture ⁻ (6), prefucture ⁻ (4), prepecter(2),	
	p-	
had(10)	: have(5), h-, hard, hade	
record(5) heavy(10)	: recorde(2), reacord ⁻ (3) : hevy(2), havy(2)	
	hevey(2), heve(2), heavey, hebi	
precipitation(24)	: preceptation(4), p-(3), preseptation(2), p-tion	
	(2), priseptation(2), presentation, presptation	
of(7) 99(3)	: have(6), o-	: 199, 909, 97
millimeters(8)	: mili(3), minics ⁻ (2), many main, miri, minim-	
	meeted	
between(5)	: bitween, b-, betoween, bettween, betwin	
four(8) and(9) five(1)	: for(3), f-(2), whole, fall	: a-(6), of : f-
o'clock(1)	: o-	
this(2) afternoon(1)	: t-, tis	: a-

3. 結果の考察

まず誤りの種類と誤り数の平均についてであるが、総誤り数は2回ともそれぞれ全語数の39.6%と、36.5%で、それほど変わらない。問題文も違うので単純な比較は出来ないが9月の方がやや誤りが少なくなっている。この割合が多いのか少ないのか判らない。しかし、いくつかの点が注目される。1つは、誤りの型の平均の大きさの順序が5月の時と、9月の時では違っている点、つまり5月には誤り語数の平均が、多い方から OMSuNSu となっているのに対し、9月には OSuMNSu となっている。2つ目には各型の誤りの全体に対する割合が変化している点である。いま、問題文を考慮の外にすると5月の調査に比べ、9月のものは聴解できなかったときには、1) 空欄のままにせず、2) 既知の単語を入れて考え、3) 綴りに関しても間違いが少なくなった、と言えよう。

次に、それぞれの問題文で多く見られた誤りを検討する。まず問題文1の、accidentally については音としては理解しているが綴りが書けない。missile は、画面の日本語の「ミサイル」に影響された者と、音は捉えても綴りを知らない者が多い。dropped については、規則動詞でしかもさほど難しい単語ではないが正しく綴れない。基礎力の欠如がうかがわれる。fighter jet と Forces については、これらの単語を1度は耳にしなければ文字にするのは相当難しいように思われる。さて、in April, in mountains の in が意外にできないのは、in April では音の連鎖のため、in mountains では機能語 in の音が弱く、被験者がその音に慣れていないためであろう。

問題文2について見てみよう。この文については、誤りの多い単語が際だっている。そのなかで、archipelago、と precipitation はかなり難しく、音を頼りに辞書に当たっても正解を得られないかも知れないので、この結果は納得できる。thunderstorms は、難しい単語のようだが日常的な単語である。語彙力の偏りが想像される。Wide areas では、音の連鎖に慣れていない。問題なのは、are being hit と of 99 millimeters の of である。are がはっきりと発音されず、being がたとえ been と聞こえたとしても前後の関係、文の主語述語関係から been だけではおかしいと思わなければならない。of が have に聞こえたとしてもおなじ理由で正解に到達して欲しいところである。しかしそうできなかったのは、文法のチェック力、Krashen の言う Monitoring が不足していたためである。

さて、誤りを消極的な方向から見てきたが、これを積極的な方向から見たらどうであろうか。つまりこれらの誤りは、正解への1つのステップであり、訓練と経験を積み、内容や単語の予測ができ、だんだんと誤りが少なくなっていくのではないだろうか。その証拠には、9月の調査時点の方が、既知の単語を手がかりにしている。ここで検討してきた誤りは、実にさまざまな形をとるが、何度も何度も聞き直したり推測を重ねるうちに正解に到達するのである。分らないからといって追求をやめたり、適当な言葉を作り上げて事たれりとしている(つまり NSu や O の型を実行する)のでは、聴解能力は決して上達しないのである。

個人個人の誤りの総数と誤りの型の割合には何の関係も見いだせなかった。つまり、ある型の誤りと誤りの総数が比例しているという、いわば聴解能力の指標になるようなものは得られなかった。

4. お わ り に

最初に述べたようにこの聴解訓練は、1) 相手のことを注意深く聞くこと、2) 聞くことにより英語らしい発想、表現を体得することの2つを目標にしてきたのであるが、実際には1) の目標に重点がおかれた。従って、精読に対して速読があるように内容を大まかに捉える聴解訓練も今後必要であると考ええる。

Krashen は、彼の Input 理論の The Acquisition-Learning Hypothesis の中で、次のように述べている。

There are two independent ways of developing ability in second languages. 'Acquisition' is a subconscious process identical in all important ways to the process children utilize in acquiring their first language, while 'learning' is a conscious process that results in 'knowing about' language.⁽⁴⁾

Krashen の言うように、言語それ自体を学習して身に付けるのではなく、言語について学習するのでは、能力の低い学習者にとって言語習得は不可能であろう。従って、今後は真の意味での言語習得をめざして、聴解訓練では何が必要かを考えていきたい。

(注)

- (1) 関根応之「放送英語の特色」長谷川潔・住友公一編『放送英語の利用法』大修館書店1986年 pp. 65-67. (1)から(3)は関根の指摘するものである。
- (2) 中畑 繁, ジョセフ・ベンソン「VOA Special English に Miscue Analysis を応用して」前掲書 pp.148-149.
- (3) Stephen D. Krashen, *The Input Hypothesis: Issues and Implications*, Longman, 1985, p.1.
- (4) *Ibid.*, pp.1-2.